

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日発行者特別換水部雜誌第六二七号
昭和三十一年十月十日第三種郵便物認可毎月一日発行
平成二十一年九月一日発行（第百十二巻第九号）

ホトトギス

九月号



俳句随想 〔三百二十七〕

汀子

野分会が発足したのは昭和五十四年十月二十六日であった。その日から三十年の歳月が流れようとしている。この会がどのように生れ発展して来たかと振り返ってみると、私が「ホトトギス」の主宰になる二年半前に父年尾が脳梗塞で倒れた昭和五十二年秋から雑詠選者を引き受け必死の日々を送っていた時、三村純也さんが訪ねてこられ、若い世代のための俳句の勉強会を作つて欲しいと言われ、私も賛同して立ち上げた句会であった。夫も元気で協力してくれた。あれから三十年、メンバーの人達も立派に活躍している。ホトトギスの雑詠選者も交代した。三十年経た現在、若い世代の指導は次の世代を担う稲畑廣太郎に任せることにした。私はこれまでの野分会で勉強してきた人の中から、なおホトトギスのために力を貸して下さる方を中心として何か勉強会を持ちたいと思つている。新しい会の名前は青芝会としたい。

青芝会は、平成二十二年一月に発足したいと考えている。具体的に何をするか決めたわけではないが、とにかくホトトギスの発展に寄与したい。

旬日記 汀子

平成二十年九月一日 ロイヤル俳壇

みちのくの秋草のかげ踏みし旅
夕月を見失ひた跡の峰のあり
露踏みて栄華の跡の偲ぼるる
露消えて芝生き生きと甦る
朝の間の露干ぬ庭を見て家居
九月六日 菅屋ホトギス会
忌日來ることを知らせて鉦叩
ふと覚めてさめざる如くひて夜学
天辺にゐし三代目松手入
九月七日 関西野分会
忌日來ることたちまちに秋めきぬ
狗尾草挿せば似合ふといふことも
九月七日 下朝旬会
うたたねの覚めて夜学の中にをり
草雲雀草に紛れぬ音色張る
その先はみづうみと聞く男郎花
九月八日 大坂倶楽部
満ちゆける月に家路をつなぐ旅
露蛤に囲まれてゐし山路かな
蜻蛉はたちまち月にまとまりぬ
計画はたちまち月にまとまりぬ
月の宴晴を信じて人のばかり
露踏み朝の体調ととふる
九月九日 錦葉倶楽部
忌日として灯下親しむ心あり
燈下親し下しきもの古きもの
片付かぬ書齋に燈下親しまむ
萩括り直し徑広げたる
九月十日 祝中萩坊子句碑建立
梅が香をとどめし大地馥郁と

九月十日 祝「笹鳴」五十年

半世紀重ねし未來笹鳴ける
初花に未來展けて行きにけり
九月十一日 清交社
仲秋や懸案一つづつ解ける
萩括り風道の草遠ざくる
仲秋の月夜々に見て旅果つる
兼活てなき鶏頭が目立ちけり
九月十二日 工業倶楽部
大和路のときやまたず曼珠沙華
渡り来し雁の先陣らしきもの
畦道を標の如く曼珠沙華
九月十三日 日本伝統俳句協会全国俳句大会
草踏めば露に濡ると知り乍ら
都心の月刻々と満ちゆかむ
待宵の月を仰ぎて十余人あり
うすくと雲の存問月にあり
九月十五日 弘子邸月見
引算の人生に入る月今宵
心充ちゆくは月満つことに似て
十六夜の旅路は帰路となりけり
改装の窓にいざよふ月なくも
九月十六日 有恒俳句会
敬老の日とていつも書齋かな
窓開けて地虫鳴く庭つなりぬ
敬老の霧山裾を下りて来し
暮れて着く雨月の山路迷はずに
九月十六日 無名会
蓑虫の糸の自由の風となる
わが庭の何をまとへる蓑虫よ
見えてゐし雨の都心を発てる
いざよひの月の都心を発てる
夜々月の名を変へてゆく雨の中

九月十七日 夏潮旬会

長き旅終へて雨月の家路かな
立待の月見届けんとして家居
九月十七日 夏潮旬会
夜々仰ぎ今宵は居待月とこそ
旅共いせし月のこと沼のこと
旅共いせし月のこと沼のこと
もたらせし庭を偲ばん萩芒
森深く懿徳の世より仰ぐ月
九月十九日 時雨会
吹く風に色奪はれし藤袴
台風と進路の同じ旅路かな
揺れる色揺れ返す色藤袴
動くものごろんと石や水澄める
似て非なりひよどり草と藤袴
九月二十日 旬会と講演の会
邯鄲の音色と知つてよりのこと
臥待月よりは名もなき夜々となる
秋草を供へたるより道連に
九月二十一日 野分会
竹を伐る音とは知らず聞いてをり
風禍より秋の出水を怖れけり
竹伐るは儀式の如くおそかに
遠くまで響く竹伐る音澄める
九月二十五日 きんぎょ会
町筋を流して風の盆となる
九月二十七日 北信越ホトギス俳句大会前日旬会
ワイパーを廻さぬほどの秋時雨
どこまでも芒の招く高速路
立山の見えねば明日も秋晴に
九月二十八日 北信越ホトギス俳句大会
満天の星のこぼせし露に濡れ
九月二十九日 ホテルプラザの集い
秋善哉抱く一本づつの宵
七人の夜長はじまる今宵かな

廣太郎句帳

廣太郎

九月五日 虚子記念文学館投句

記念樹の下に秋暑を解きにけり

九月六日 菅屋ホトトギス会

口丸家親子三代松手入
鉄の城銀の芒原

九月七日 野分会菅屋例会

秋出水住宅街といふ油断
竹伐りてより百幹の鎮もれり

九月八日 朝日カルチャー草量句会

君消えてよりコスモスの揺れ初むる
コスモスに来て乱れ髪直しけり
秋の宵阪神えらいことやがな

九月十一日 土筆会

風の盆項に君と判るまで
オフィス街邯鄲に夜を明け渡す
吾亦紅より吾亦紅までの距離
指先を風にあづけて風の盆
曼珠沙華都心の色でありにけり

九月十三、十四日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

初鴨に水辺躍つてをりにけり
筆策の音に月月の使者迎へらる

九月十六日 草木瓜会

長々とながながと穴まどひかな
穴惑ふために草丈ありにけり
秋潮を割りて潜水艦現るる

穴まどひ千年杉を登りゆく
九月十八日 登高会

鱗雲より透けてゐる星いくつ
貴腐葡萄要としたるワイナリー
曼珠沙華重たき色でありにけり

九月二十日 ホトトギス社句会

邯鄲のレクイエムめくドームかな
九月二十一日 村上鬼城顕彰全国俳句大会

星月夜鬼城の星を探しもし
九月二十二日 若水句会

初月に呪はれたるかタイガース
露踏めば横川に心馳せてをり
子規囀む人露の袖引き寄せて

九月二十四日 目黒学園句会

蟋蟀を聴いて開店準備かな
一枚の花のペールや大花野
つづれさせ闇彩つてをりにけり
紫を風に移して大花野
大花野とは人を呼ぶ風を呼ぶ

九月二十七、二十八日 北信越ホトトギス俳句大会

やや寒き橋の起伏でありにけり
星の綺麗露を宿してをりにけり
冷まじき古墳の歴史ありにけり
窓といふ宿のもてなし星月夜
虚子の世を露けく語り寿

平成二十年九月一日 夢二会全国俳句大会

霧抜けてより原色の野となりぬ
翅畳むより秋蝶の色となる
君の香と霧に溺れてしまひたる

九月三日 一水会

これ以上主張は出来ぬ千草かな
九月四日 蕉心会

蕉像の目線に鯨の育つ水
新涼に喝を入れたる日差かな
秋日傘句敵といふ二人連れ
秋日傘誰も差しかけてくれへん
船の水尾より残暑解く風生る
残暑てふ佳人の顔の歪みかな
忌心といふ穂芒の戦ぎかな

九月五日 六甲会

人拒む距離六甲の鳥頭
霧見せて富嶽見せざる鉄路かな
曇天を発ち霧抜けて晴に着く
鳥頭灯し六甲暮れ初むる
政界に霧立ち籠めてをりにけり
タイガース何時になつたら霧晴るる

雑詠

廣太郎 選

散るこころ闇に失せたる桜かな 東京 河野美奇
 谷渡りとは鶯も花びらも 同
 春灯や 虚子 漱石の文机 同
 暮れてゆく花に御僧まだ着かぬ 神戸 山田弘子
 満開の花に狎るるを怖れけり 同
 句碑一基加ふ弥生の吉野山 同
 虚子若き日の声を聞き春惜む 同 千原叡子
 桜蔭降るよ惜春居士の印 同
 牡丹や語り伝へん虚子のこと 同
 深は新なりとひたすら時鳥 福山 竹下陶子
 父祖よりの家業繁栄燕の巢 同
 枯蔓を焚けば来給ふ歌の神 同
 お供の白牡丹の巨きさよ たつの 浅井青陽子
 恒例のさくら祭の列の中 同
 一番茶摘む段取りもやつと出来 同
 風誘ふ雪 雪誘ふ晴も春 京都 安原 葉
 子等寄せて語る未来へ木の実植う 同
 がらあきの新幹線や山笑ふ 同

知らぬ間に咲き満ちてぬし家桜 樫原 稲岡 長
 初花を見したかぶりは満ちてなほ 同
 春の空うすべに色を溶かしたる 同
 万緑の蠢く襷でありにけり 香川 湯川 雅
 見てをりし海月に乗せる旅心 同
 揚雲雀まだその辺は空の底 同
 遠足の眼に耳の象鼻の象 八尾 岩垣子鹿
 遠い国からのごとくに藤散り来 同
 雨こぼし雨抱き雨の牡丹かな 同
 苗代に細かき風の生まれけり 同
 拡がるに一途でありし蔦若葉 同
 筍の成長力にあるゑぐ味 同
 葉桜に風乗つてくる乗つてくる 神戸 立村霜衣
 葉桜の波打つ彼方なる天守 同
 眠さうな風藤棚を過ぎてゆく 同
 清盛忌過ぎし平家の里臚 東京 大久保白村
 落人の里の断崖涅槃西風 同
 春の旅虚子の句想ふ平家村 同
 木瓜の花切り詰めありし枝先に 福岡 松尾緑富
 豆腐屋の遠ざかり行く木瓜の花 同
 何となく外出億劫木瓜の花 同
 リラ咲いて札幌を歩す人多し 熱海 嶋田一步
 リラ咲いてベンチ空くことなかりけり 同
 リラ咲いていつか来た道家増えぬ 同

雑詠句評（八月号より）

雅 ・ 仁 義 ・ くに彦

しげ人 ・ 純 也 ・ 比奈夫

昭代 ・ 弘 子 ・ 一 歩

暮 潮 ・ 廣太郎

はじまりし句碑の春秋祝ぐ桜 京都 安原 葉

「一山の花の散り込む谷と聞く汀子」の句碑が、四月十二日、吉野温泉元湯の宿の庭に建立された。その句碑披の折の句。

その句碑は、今披かれたとは思えないほど、しつくりと落着いた姿で、みよしのの景に嵌め込まれた。

折しも、桜は満開から落花へと移る最高の日であった。咲いている桜も、散ってくる桜も、今日の日を祝い、句碑を耀かせた。桜に日が照る度に、風が桜の花びらを連れ来る度に、歓声がある。新しい句碑に感動した日。その場に居合わせた誰もが、これからの句碑の日々を思い、心から祝った。皆の心を伝えてくれる一句である。（雅）

平成二十一年四月十一、十二日に行なわれた「吉野くつろぎの旅」は、もうお馴染みであろうが、今回も満開の花が迎えてくれ

た。そんな中定宿である「吉野温泉元湯」の庭に汀子句碑が宿の御世話で建立された。作者の句碑に対する喜びに溢れた存問の句なのである。（廣太郎）

明けてゆく山が桜を大きくす 八尾 岩垣子鹿

夜が明けるにつれて、桜の咲いている山がはつきりと見えるようになつてきた。はじめは桜と山が混然と見えていたのだが、眺めているうちに桜の咲く景が次第に大きく見えてきた。そのとき作者は、山に溢るるほど沢山の桜が咲いていたことを知り、さらにその美しさに魅了されてしまったのである。そして作者は、まさにその情景を「山が桜を大きくす」と巧に叙している。作者の桜の花への憧憬が果たされた瞬間でもあったのであろう。

（仁義）

吉野の桜に限った事ではないのかも知れないが、山桜は、夜の山気に花卉がしつとりと落ち着くようである。朝日が差し込む頃になると、そのしつとりした桜が、何か目覚めたように風に揺れて、或いは落花を始める。活き活きとした山桜の朝の姿を見事に表現している。（廣太郎）

天地有情

花子選

語らへば墓前へとまた花吹雪 龍ヶ崎 今橋眞理子
 花仰ぐ後姿に声かけず 同
 日を弾く白梅風を解く紅梅 東京 稲畑廣太郎
 雪解 川六 甲 嵐 従へて 同
 山焼いて文学論をたたかはず 熊本 岩岡中正
 甘茶仏眉目秀麗にておはず 同
 み吉野の谷の一夜の春の霜 京都 安原 葉
 桜蔭降るや港の見える丘 同
 この句碑の遅日の庭を去り難し 東京 河野美奇
 見そなはず天より地より落花かな 同
 月朧微かに雨意のありやなし 樺原 稲岡 長
 行楽地混んで憲法記念の日 同
 行春の旅を信濃の風に解く 神戸 長山あや
 茄子にしかなれぬ色もつ茄子の苗 同
 みよし野の桜老いゆく吾等また 同 山田弘子
 花の精すでに通へる句碑ならむ 同
 吾を送る日の幻想や花水木 豊中 瀧 青佳
 気に抜けた大往生か花水木 同

いく千の藤房に音起りたる 福山 竹下陶子
 天帝の瓔珞なせる地ざり藤 同
 誘はれて春の帽子も取り出だし たつの 浅井青陽子
 白牡丹あたりを払ふ一とこ 同
 落花来て飛花来て前後見失ふ 神戸 後藤比奈夫
 この飛花に攫はれ天に昇らむと 同
 初蝶といふたまゆらの浜を飛ぶ 徳島 上崎暮潮
 多宝塔揺れてはをらず花揺るる 同
 虚子の声流るる館に聴く遅日 吹田 宮崎 正
 散りし友憲法記念日に憶ふ 同
 遅しく二百十日の空に星 金沢 藤浦昭代
 わだつみも風に追従して厄日 同
 むらさきをいつも遠くに旅五月 八尾 岩垣子鹿
 濃き八重に奈良一番の藤と言ふ 同
 青あらし断筆宣言とは悲壮 吹田 大橋敦子
 母の日や毅然の遺影何やらむ 同
 銀河系支へて一人静かな 渋川 木暮陶句郎
 忘れ物めく肩繭でありにけり 同

天地有情句評

汀子

桜蔭降るや港の見える丘 京都 安原 葉

「近代俳句の夜明け展」の港の見える丘も桜蔭降る頃となった。

この句碑の遅日の庭を去り難し 東京 河野美奇

なお暮れぬ庭の句碑への愛着。

月朧微かに雨意のありやなし 榎原 稲岡 長

朧月の語りかけてくるもの。

行春の旅を信濃の風に解く 神戸 長山あや

信濃の春を惜む旅に得た風にくつろぐ心。

みよし野の桜老いゆく吾等また 神戸 山田弘子

夢と現実の中にある吉野山。

(以下略)

亡くなった友との存問。

語らへば墓前へとまた花吹雪 龍ヶ崎 今橋真理子

日を弾く白梅風を解く紅梅 東京 稲畑廣太郎

白梅と紅梅と日と風と作者の感性。

山焼いて文学論をたたかはず 熊本 岩岡中正

遠慮ない仲間。